

# 指導資料

## 美術 第31号



鹿児島県総合教育センター

- 中学校対象 -

平成15年11月発行

### 個に応じた美術科の学習指導

美術科学習では、生徒がゆとりをもって楽しく美術の活動にかかわり、学ぶことの喜びを味わい、個性を生かした多様で創造的な活動することが求められている。その実現のためには、基礎となる感覚・感性や想像力、技能などの資質や能力を一層育てることが大切である。つまり、これまで以上に生徒一人一人の個性を生かしながら基礎的能力を身に付け、創造活動に取り組むことができる「個に応じた美術科学習指導の充実」を目指す必要があるということである。

個に応じた美術科学習指導とは、生徒一人一人が自分の表現したい思いに基づき、思い通りに表現できた喜びを実感できるような学習の場を設定することである。その実現のためには、発想したことや想像したことなどが、よりふさわしく美しい表現方法になるように創意工夫し、創造的に表現する能力や基礎的技能を身に付ける必要がある。

そこで、本稿では個に応じた美術科の学習指導はどうあればよいかその在り方について述べる。

#### 1 個に応じた学習指導を充実するための指導計画

各学校においては、個に応じた学習指導を

充実するために、指導計画のより一層の見直しや充実を図ることが望まれる。さらに、一人一人の生徒が個性を生かして主体的・創造的に学習することができるようにするためには、3年間を見通した指導計画を作成する必要がある。そこで、指導計画を作成するに当たっては、次のようなことに配慮したい。

#### (1) 目標の具現化

第1学年では、特に表現及び鑑賞にかかわる基礎的能力や理解の確実な定着を図ることを重視する。さらに、第2学年及び第3学年においては、第1学年で身に付けた基礎的能力や理解を深め、創造的能力として伸ばし、柔軟に応用しながら、創造活動を一層充実させる。また、生徒の実態を踏まえ、美術科で目指す生徒像を実現するための資質や能力を見通して設定する。

例えば、年度当初に美術科学習の手引きを作成し、生徒に美術科の学び方等を明示することで、主体的に学習を進めていくことができるようにする。

#### (2) 生徒の発達課題や実態の把握

創造的な表現活動に取り組むとは、生徒がこれまでの知識・経験などを駆使し、考え、判断し、未知のものに向かって挑戦し

ていくことである。その際教師は、生徒の興味・関心や意欲につながる学習経験や創造的な表現活動の実態把握、生徒の発達課題等を十分に把握することが重要である。

例えば、小学校の図画工作科授業との関連性を踏まえることで学習経験等の実態をより明確にとらえられる。

### (3) 題材の設定や内容の取扱い

第1学年においては、絵、彫刻、デザイン、工芸のいずれをも扱う。年間45時間の中ですべての領域、分野を扱うことになるので、短時間で基礎的技能が身に付く題材や指導の工夫が必要となる。また、生徒の実態に応じて各分野を関連付けたり、関係する分野を一体的に扱ったりする。

第2学年及び第3学年においては、特定分野を選択して表現能力を高めるなど、より質を高める学習を行えるようにする。さらに、学校や生徒の実態等に応じて弾力的な学習が展開されるように配慮するとともに、生徒の学習に対する多様な希望に応じることができる題材を設定する。

例えば、絵か彫刻を選択できる学習において第2学年で絵を選択した生徒が、第3学年では経験できなかった彫刻を選択できるように題材の内容や配列を工夫する。

### (4) 表現と鑑賞の関連を図る指導

表現と鑑賞の相互関連を図り、生徒一人一人の表現の質がより高められるようにするとともに、表現することで鑑賞する能力もより質的に高められるよう十分配慮する。

例えば、表現題材であっても、題材の指導計画の途中に、鑑賞の小題材を組み入れより関連性を図ることで、表現の質を高め

ることができる。

## 2 個に応じた学習指導の進め方

生徒一人一人の希望や考えを大切にし、それぞれのよさが発揮できるように柔軟な指導を工夫する必要がある。そこで、指導上の配慮事項と手だてについて、例を挙げて述べる。

(1) 生徒一人一人のより一層の理解に努める。

教師は、画一的に教え込んで表現させるのではなく、生徒一人一人が本来どのように表現したいのかということについての理解に努めるとともに、その表現に対する関心や意欲、活動の速さや能力の程度、表現の特質など、その実態と目標を踏まえる必要がある。それを基に授業を構想し、個性を生かす柔軟な指導に努めることが大切である。

新しい題材に入る前には、これまでの評価記録やアンケート調査等を基に、生徒一人一人の表現活動への実態を踏まえるように努める。

常に、机間指導中の会話の中から生徒一人一人の思いをくみ取るように努める。

(2) 生徒一人一人が自ら主題を発想し、自分の思いを練り上げる活動を支援する。

生徒一人一人の発想や構想を広げ、表現への見通しと意欲を高められるように、個に応じた方法で活動できるようにする。

感性を豊かに働かせ、作品化したい対象を凝視させる。

これまでの授業や様々な体験を通して感じたことや感動したことを想起させる。

発想の手掛かりとなる写真や雑誌・新聞の切り抜きなど、資料や美術図書を準備させる。

多様な表現作品例などを提示する。

スケッチなどを基に発想させたり、想像力を働かせて単純化や省略、強調させるなどの視点から検討・工夫をさせたりする。

(スケッチの指導については「指導資料」通巻第1343号を参照)

試作や話し合いなどの活動を取り入れさせる。

(3) 生徒一人一人が自分の表現形式や方法で表現できるように支援する。

生徒の学習経験や能力、発達特性の実態を踏まえ、生徒が自分の表現意図に合う表現形式や技法、材料などを選択し、創意工夫して表現できるように支援する。

日本の美術表現をはじめ、様々な表現形式や技法に触れさせ、自分に合う表現形式を選択し創意工夫できるように助言する。

生徒が創造性を発揮し、多様な展開ができるように、いくつかの材料から程度や時間などを配慮して選択させたり、生徒自身に地域にある身近な材料などを準備させたりする。

(4) 生徒一人一人の思いに沿って共感的に働き掛けるように支援する。

教師が、生徒一人一人の思いに沿って生徒の構想や表現のよさを多様な方法で評価し、励ますことによって、主体的な表現へ意欲を高めることができる。また、基礎的能力を定着させ、生涯を通じて自己実現を

果たしていく態度が形成されるように、生徒の個性や能力に応じてきめ細かな指導を行うように働き掛ける。

生徒が、評価規準の内容を具体的なイメージとしてとらえられるように工夫する。

教師は、あらかじめ生徒の表現やつまづきを可能な限り予測し、授業



を繰り返す中で評価規準をより信頼性の高いものへと見直すとともに、生徒をとらえる目を鍛え、責任と情熱をもって指導に生かすように留意する。

いい色だね

生徒一人一人に何がどのように身に付いたか振り返ることができるように、自己評価や相互評価を工夫し、学習過程の中で効果的に用いられるようにする。

(5) 互いの表現のよさや個性などを認め、尊重し合うように支援する。

生徒一人一人が自分の個性を發揮し、互いの個性を理解し合うように支援することは、自分の創造表現に自信をもたせる上で重要である。

各表現の完成段階等で、生徒が制作の思いを基に表現の工夫を発表したり、他者のよさを認め合ったりすることができるように、学級全体やグループなどの形態を工夫する。

互いの個性を生かし、協力して創造する喜びを味わわせるため、共同で行う創造活動を経験させる機会や場を設定する。

### 3 個に応じた美術科学習の実際

- (1) 題材名 情景を絵または彫刻で表す(第2学年)
- (2) 目標 心に残る生活の断片や出来事からイメージを広げ、構想を基に表現したいことに合わせて材料や表現方法を創意工夫することができる。さらに、絵か彫刻のどちらかを選択し、表現する楽しさを味わいながら表現することができる。
- (3) 指導計画(全8時間)〔下線部は個に応じる視点との関連事項「」は重点評価項目〕  
(鹿児島大学教育学部附属中校 松下幸男教諭の学習指導案を基に作成)

過程	主な学習活動	時間	指導上の留意点(評価規準及び評価方法)
発想	1 これまでの経験を振り返り印象に残っている生活の断片や出来事について考え、自分を見つめ直す。	2	ワークシートへの記述、グループでの意見交換、発表から発想ができるように指導する。 興味・関心をもち主体的に取り組もうとしている。(興味・意欲・態度：観察、ワークシート)
構想	2 いくつかの記憶の断片からイメージをスケッチに表し、構想を練り、表現への見通しをもつ。 (1) 絵や彫刻の表現方法の違いやそれぞれのよさについて、参考作品を基に考える。 (2) 自分で構想を練る。 (3) スケッチを基に話し合う。 (4) イメージを再度まとめ直し、材料や表現方法を決める。		どのような表現を目指すか、スケッチに表したり、参考作品などを見たりして、自分で考えたり話し合ったりするなどしてとらえさせる。 表現意図に合った材料や表現方法を選択し、自分なりの表現であるかを考えさせ、見通しをもたせる。 自分の主題に合わせて、構想を練り、見通しをもつことができる。(発想・構想：観察、スケッチ、計画書)
表現	3 主題となる表現意図を再度確認し、絵と彫刻のグループに分かれて制作をする。 (1) 計画に基づいて制作する。 (2) 途中の作品を基に中間発表会を行う。	4  2	絵では、筆の使い方や色の作り方、彫刻ではつり合いやバランスの取り方を高めたいという生徒の願いにこたえるため、技法紹介や参考作品、個別指導を基に発見・工夫をさせる。 主題を基に相互評価を行い、表現の工夫や取組などを振り返らせる。 自分の主題を基に表現や技法を工夫し、表現できる。(技能：観察、作品)
鑑賞	4 完成した作品を互いに鑑賞するとともに自己の表現を振り返り、表現の達成感を味わう。		主題を基に表現方法や表現の工夫など鑑賞させ、それぞれの表現のよさについて理解させる。 自他の作品のよさを味わう。(鑑賞：観察、評価カード)

### 4 まとめ

新しい発見をしたり自分の思いを実現できたりした喜びに浸っている生徒たちの生き生きとした目の輝きは素晴らしいものである。各学校では、生徒一人一人が自分の思いを基に、個性を生かして主体的・創造

的に取り組めるように、これまで述べてきたことを踏まえ、よりよい授業の創造を目指して取り組んでほしい。

【参考文献】遠藤友麗著 新中学校教育課程講座 美術 平成12年 ぎょうせい  
(第三研修室)